

ヒマラヤ保全協会
夏のスタディツアー2007
報告書

2007年9月

特定非営利活動法人

ヒマラヤ保全協会

The Institute for Himalayan Conservation (IHC)

目次

はじめに	3
日程	3
位置図	4
ナルチャン村滞在記	5
ナルチャン村で聞いたこと	23
スタディツアーに参加して	27
提言：ネパールのために日本の教訓をいかせ！	32
写真	33

はじめに

2007年8月2日～8月12日にかけて、ヒマラヤ保全協会・夏のスタディツアー2007を、「ネパール・ヒマラヤの環境保全 ～専門家によるレクチャーつき～」と題して実施した。

一般参加者は4名、現地ボランティア1名、リーダー1名の計6名で、ネパール西部ミャグディ郡のナルチャン村をめざした。途中、ベニからナルチャン村までのカリガンダキ川の経路は、現在、道路工事が急速にすすんでおり、地形の様変わりはいちじるしかった。また、工事現場をあるくということに危険な箇所もあった。斜面をきりくずす道路工事は、あらたな地滑りを誘発しており、急峻な山岳地域の開発の難しさ、問題を目の当たりにすることができた。

ナルチャン村での滞在は1泊2日とみじかいものであったが、ヒマラヤ保全協会の「生活林づくりプロジェクト」を中心に見学し、植樹もおこなった。ホームステイ先では参加者各自でホストファミリーの皆さんと心あたたまる交流をした。

今回のツアーは雨季（モンスーンの時期）に実施したので、ヒマラヤの雨季（モンスーン）の世界を実体験することができた。ただし、ツアー期間中は天候にめぐまれ、アンナプルナ山群やニルギリ山を見ることができた。ヒマラヤの世界は、雨季と乾季のコントラストがいちじるしい。それら両者を実体験してこそ、本当のヒマラヤを理解することができる。

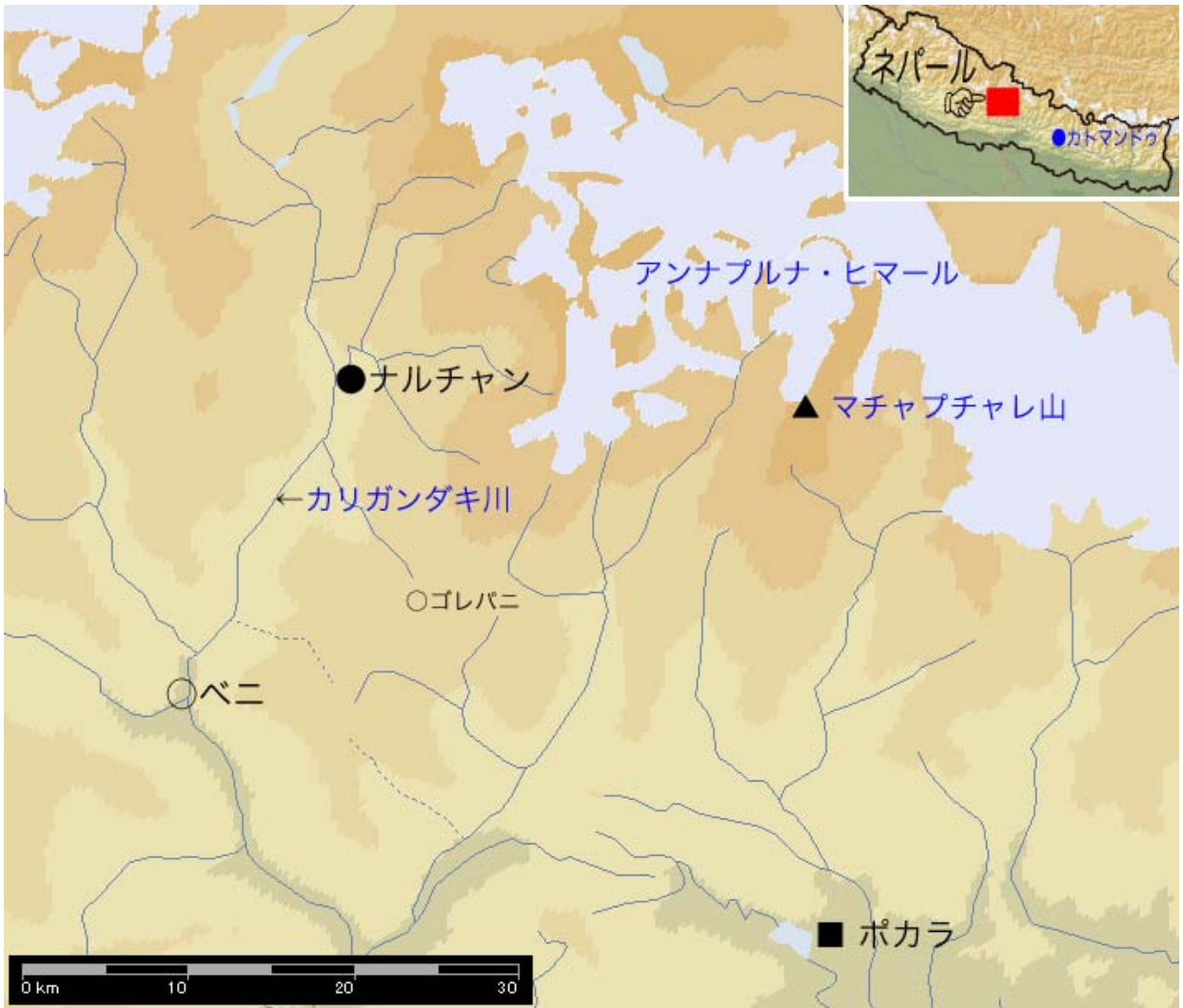
今回のスタディツアーは非常に短期間で、ヒマラヤ保全協会の事業地まで行ってしまう企画であったが、それでもかなりの効果があがることが証明された。

日程

No.	日付	曜日	場所	プログラム	食事	宿泊先
1	8月2日	木	羽田空港-関西空港-バンコク	移動(フライト)	機	ホテル
2	8月3日	金	バンコク-カトマンДУ	移動(フライト) → 自由行動(カトマンДУ観光) → レクチャー(1)	○ 機	ゲストハウス
3	8月4日	土	カトマンДУ-ポカラ	移動(バス) → レクチャー(2) → 自由行動(ポカラ観光)	○	ゲストハウス
4	8月5日	日	ポカラ-タパニ	移動(タクシー+バス+ジープ) → ヒマラヤ・ミニトレッキング → ミーティング	○ ○ ○	ロッジ
5	8月6日	月	タパニ-ナルチャン村	ヒマラヤ・ミニトレッキング → ヒマラヤ保全協会の環境保全事業を視察、植林	○ ○ ○	ホームステイ
6	8月7日	火	ナルチャン村-タパニ	ヒマラヤ保全協会の環境保全事業を視察 → ミニトレッキング → 温泉入浴	○ ○ ○	ロッジ
7	8月8日	水	タパニ-ポカラ	ヒマラヤ・ミニトレッキング → 移動(ジープ+バス+タクシー)	○ ○	ゲストハウス
8	8月9日	木	ポカラ	ミーティング(スタディツアーのまとめ) → 自由行動(ポカラ観光)	○	ゲストハウス
9	8月10日	金	ポカラ-カトマンДУ	移動(バス) → 自由行動(カトマンДУ観光)	○	ゲストハウス
10	8月11日	土	カトマンДУ-バンコク	移動(フライト)	○ 機	機中泊
11	8月12日	日	関西空港-羽田空港	羽田空港着、解散	機	-

※レクチャーのテーマ：(1)「ヒマラヤの自然環境」「ヒマラヤ保全協会の環境保全事業と参加型開発」、(2)「ヒマラヤの温泉のしくみ」「事業地の概要」

位置図



ナルチャン村滞在記

M. S.

「マライ・ハリヨ・デーライ・マンパルツァ」、つまり「私は緑が大好きよ」。これがツァンデビさんと私との、このステイ初の会話らしい会話でした。

私がネパールの村にステイするのは今回が三度目。でも、これまではホストファミリーには必ず子供達がいて、こちらが意識せずとも向こうから近づいてきてくれました。

今回は初めての山村でのステイなのではりきってはいたのですが、ステイ宅に案内されてみると、女性がお一人でお住まいの家庭だったのです。旦那さんはアラビアに出稼ぎに出ている、お子さんは少し離れた町の学校で寄宿生活を送っているとのこと。家はこの山村の中では少々近代的で、コンクリートでできていました。

女主人のツァンデビさんは、お若く、私達と同じモンゴロイド系の顔をしたマガール人。食事をはじめとして色々世話してくれますが、シャイな方で話しかけてくることはありません。私の方から何か話そうとしても、山村の生活で、また一人の生活であるからか、彼女は洗濯をしたり、フキの茎の皮をむいて細く裂いたり、煮炊きを始めたりと、ほとんどずっと家事をしています。仕方なく私は家の戸口に座りこんで、この谷の村に広がる畑や田んぼ、川向こうの農村風景や切り立った崖などを眺めてぼんやりしていました。

時々ツァンデビさんは休憩をとり、私の近くにしゃがんであたりを眺めていました。「英語しゃべれますか？」と英語で尋ねると、残念そうに首を横に振ります。私は「旅の指差し会話帳（ネパール語）」を取り出し、話したい単語を探してページをめくりました。

ツァンデビさんはきれいな緑のバンドナで髪を覆っていました。民族衣装のスカート（？）も緑が基調で、手首の腕輪も腕時計も緑なのでした。それで私は、「タパイ、ハリヨ・マンパルツァ？」（緑が好き？）と尋ねたのです。すると彼女は「マライ・ハリヨ・マンパルツァ」（緑、好きよ）と答えました。そして少し肩をすくめるような、首をかしげるような微笑を見せ、「緑が大好きよ」と「デーライ（とても）」をつけてもう一度言ってくれたのでした。

この旅の一番の目的はIHCの植林活動地であるこのナルチャン村で、植林体験をしようというものです。私達は早速、IHCの支援で作られた村の苗畑を視察し、それから苗木を持って、村の学校の沢山の生徒達と一緒に近くの丘に登って行きました。その丘は草に覆われてはいますが、木は生えていません。斜面は急で村を見下ろす形になっています。村の周りの林である生活林は、住民が煮炊きをする薪や材木になり、換金作物となる果樹であり、また保水や地すべりを防止する役目を持っています。これを植え育てるのは一朝一夕ではできないことです。

実は私はこの植林体験に対してある疑念を持っていました。植林をする場所はネパール、植林をする人も現地に住んでいるネパール人です。大事なのは、長い期間をかけて植え続けることです。数日しか滞在しない日本人が、一本や二本の木を植えてどうなるものだろうと。実際に困難な作業を続けて行くのは村の人々なのでした。

私が丘に上がってそこに苗を植えようとしたとき、IHCネパールのスタッフのチトラさんが私のカメラで写真をとってくれました。私は鉄の棒をもって、地面を突き、穴を掘ります。これが結構力が要ります。苗の根が十分入る大きさの筒状の穴をあけると、そこに苗を入れて土をかぶせます。チ

トラさんが言いました。「難しい仕事でしょう」と。

「難しい仕事ですね」と私は掘りながら答えました。一つの穴を掘るのに、夏の暑さも手伝って、額から汗がこぼれます。力是要るけれど、一つ二つならできない作業じゃありません。でもこの作業を数千数万と繰り返すのです。頭ではそれが分かっているけど、実際にこの一つの作業をやってみて、これを繰り返していくことはきつい作業だなと実感しました。この実感が得られることに意味があるのではないかと、そう思いました。日本に帰っても植林の話をしたり聞いたりする時には、きっとこのときの記憶がよみがえるでしょう。だからこそ、遠い国の植林の援助が大事だと思いつけられるのではないかと。

夜はツァンデビさんの家に戻り、近くに住むプラドゥマンさんが訪ねてきてくださって、ロキシー（酒）を飲みながら歓談しました。彼は英語ができるので、どうしてもツァンデビさんではなく、彼とばかり英語で話してしまいます。彼はタライ（インド近くの低地）出身で公務員であり、村の診療所に派遣されてきた方でした。ネパールは貧しい国だ。日本は発展した国だ。ネパールは日本より何年遅れているだろう。そういったことをおっしゃいます。私はこういうときいつも「ネパールは美しい国じゃないですか」と言い、ネパールの良い所や日本の悪い所を話そうとするのですが、発展した国の人がそういうことを言って説得力を持つだろうか、とよく思います。でも例え数字的に貧しいのが事実だとしても、ネパールの人々が自分達の国の良い所を自覚して、それに誇りを持つことが最も大事なことではないかと考えます。翻ってそれは私達も同じです。私も時々日本に悲観的な思いを抱くことがありますが、日本という場所をもっと見直そうという気になります。

夜、寝静まった頃に、ガラガラバラバラと遠くから砂利道を車が走るような音が何度もしました。それは、川の対岸にある崖が崩れる音です。急峻なヒマラヤの谷の壁面が、最近は中国が川岸に道路を作る工事を行っているせいでもあるそうですが、少しずつ確実に崩れ続けています。見たところ地滑りが起こりそうな地域に集落があったりもします。このようなことの対策も、誰かがやっていたらいいでしょう。

今回のステイは一泊なので、起きた次の日はもうお別れの日。食事をして、またツァンデビさんと二人で縁側でぼんやりしていました。でもどうも彼女との距離が縮まりません。昨夜プラドゥマンさんが、前にもこの家に日本人の女の子が泊まったことがあり、その子が歌い踊るのをみてツァンデビさんはとても喜んだという話を聞いたのを思い出しました。

私は彼女に話しかけ、日本の歌を歌ってみせました。下手くそで、陳腐ではありますが「涙そうそう」です。すると、ツァンデビさんは笑顔で、初めて私の持つネパール語の本を覗き込みました。突然、彼女が近づいてきたように感じました。もう少し早く歌を歌えばもっと彼女と話ができたかもしれません。それでもたった一日、急がない程度での精一杯の交流は、それなりに上手くいったのではないかと自分では思っています。

ナルチャン村滞在記

M. H.

カトマンドゥからポカラまでの昨日の移動は寝てしまったので今日は起きて景色を堪能しようと思った。タクシーを走らせてすぐにヒマラヤ山脈がよくみえた。起きていられたのはタクシーを載って最初の30分までだった。

ふと目が覚めると鉄骨で出来た吊り橋に目を引かれ写真を寝ぼけながら撮った。タクシーはアスファルトではなく河川の岸をタクシーが走っており、間もなくタクシーがとまった。しばらくそのままタクシーにのっていたが、土砂崩れで道がふさがれていることを教えてくれて、タクシーから降りた。

土砂崩れの現場にいかず待機していて暇をもてあました私たち4人と現地の男の子4人がいた。男の子たちはバクテンをタイミング良くシャッターを押してもらいたくてパフォーマンスを披露し、そのたびに写真写りをチェックしていた。30分くらいたっただけだと思うがそれ以上に時間が過ぎたような気がする。私たちのタクシーより後ろに止まっていたバスから乗客が降り崖崩れの先に向かって歩き始めた。それからすぐに100Mくらい前に止まっていた車から大人が何かを呼ぶと男の子たちがスピードダッシュでその車の屋根に乗っていた荷物を降ろし始めた。その荷物をさっきバスの乗客が歩いていった方へ運び出していた。その速さに驚いた。それから私たちも呼ばれた。男の子たちは荷物を運び終え戻ってきていた。彼らは私たちの荷物を運びたがっていたが残念ながら私たちはタクシーが崖崩れの現場まで運んでくれた。彼らは学校にいていないのかたまたま今日は移動中で休んだのかわからないが荷物を運ぶバイトを先ほどしていたのだ。今回足止めを受けていた実際の原因は、土砂崩れが数日前にあったようだが、大きなトラックが迂回路上で止まってしまい、動かしようがなく足止めをくらっていたことがわかった。先ほど私たちより先に行った人々は行き止まりの先に止まっている車に乗り換えていたのだ。

私たちも小型バスに乗り換えることになった。ここまで乗ってきたタクシーはお世辞にも快適な車ではなく、数十年以上前の車で座席にはクッションがあまりなく車内のスペースも狭い。それがふかふかのシートで二人分の座席を一人で占有できうれしかった。そんな快適な車が進むのは舗装もされていなくただ車が通れば良いといった道路だった。小さな小川を横断したり、道がでこぼこすぎて振動で体の中に浮いたりして遊園地のアトラクションに乗っているようだった。何かの拍子に崖から落ちるんじゃないかと恐怖にかられた。そのバスが通った中で一番大きな村を通過するときゲートがあり、お金を徴収していた。ナルチャン村でも感じたことだがまだ村々には税金を徴収するという制度がないようだった。その中で村の経営をするにあたり予算は各村が知恵を振り絞っているようだ。このようにこの主要道路でお金をとることについては良いか悪いかは別として有益な財源になるだろう。そんなことを考えているうちにベニも着いた。

ベニは村に到着すると広場がありその周りにだけ店があるかと思いきや、橋を渡ると村の中は道路が舗装されておりベニの村を抜けるのにかなりかかった。ここからジープ乗り場まで歩いて1時間との話だったが運よくタクシーがつかまった。タクシーはこれまたいつ壊れても良いといったタクシーでドアのところは骨組みの鉄だけの箇所もあり車の底が石にぶつかる度にガソリンタンクが壊れて爆発しないか心配になった。歩いて1時間といわれたが乗ってすぐ目的地の建物がみえ短い距離ではあったが、おんぼろタクシーでも炎天下の中歩かずに済んだのでよかった。タクシーが着いた村で遅い昼食をとりジープ乗り場まで歩いた。普通ならジープの終着点までいっきに車で行けるのではと思うかも

知れないが、降りる度にバイクが通れる程度のつり橋を渡るので車では通過できない。そもそも車をどうやってつり橋の先まで運んだかが謎である。ジープ乗り場では定員になるまで出発しないらしい。朝から移動でかなりくたくたであった。程なくしてジープが戻ってきたのでそれを貸しきった。座席は定員オーバーだったため、後ろの荷台に乗るのを希望したが、後ろのドアが締め切れ横しか開かなくて期待外れで残念だった。もっと開放されているのかと思っていた。横が布製の窓だったためそこから外を覗けたが山側だったため景色がまったくみえなかった。しょうがないのでリュックを布団代わりにして寝てしまった。

私の中ではここからポーターが荷物を持ってくれるのかと思ったがそうではないらしい。寝起きでぼーっとしていたので良く覚えていないが、ジープへ乗り降りするような場所には見えず何もなくて下ろされてポーターが待機しているとは思える家すらなかった。今日はポーターがいなくて自分で荷物を運ぶのかと悟った。荷物が重たいせいか足取りは重たかった。だいぶ軽くしたと思った。空港でみなさんに合ったときから感じていたが、本格的な登山に行くリュックを背負っていた。どうみても私のリュックは小さかった。45リットルあると思っていたがそれは勘違いであることはすぐに理解できた。朝から私の荷物の少なさにはかなり不安を感じていた。しかしどう考えてもボカラに置いてきたスーツケースの中は空だったし忘れ物は”ない”と言い聞かせていた。荷物は重たかったが、それでも見た目では一番小さいリュックだったので”私が一番に荷物は軽いはず”と発想を転換した。道は登山道ではなく舗装されていない山道だった。1時間くらい歩いたのだろうか、小さな商店でポーターが見つかった。これで一安心である。私はポーターも一緒にパーティで行動するのかと思っていたが、そうではなかった。私たちは荷物だけ預けて先に歩き始めた。到着寸前の休憩箇所でもポーターにあった。ポーター1人で3人分の荷物を持ちサンダルで歩いている。かなりの体力差である。山小屋に到着する頃はもうあたりが暗くなり始めてかなり疲れた。

翌日タトパニからナルチャン村まで歩いて1時間くらいだろうか、タトパニからナルチャン村が見えた。タトパニからナルチャン村までは近かったと思う。すぐに着いた。しかし村の外れから中心部までがかなりあった気がする。村の周辺には畑が広がっていてなかなか到着しなかった。もう着いたと思っていたから精神的にもかなり疲れた。

到着場所は商店があり、その商店の前にちょっとした広場になっていて、地面はコンクリートで固められていた。その中心部から3方向の道がつづいていた。その広場から7-80M以上落下しているだろうか、大きな滝が見え絶景である。村の人々が集まるまで汚れ物の洗濯をした。広場の横に共同の水道があり、私が洗濯している時に女の人が洗濯に来ていた。今日は洗濯日和だ。広場に面してトイレがあったが、商店が所有しているトイレのようで普段は中に入れないように外から鍵をしめていた。後で行った学校のトイレも鍵が外からかかっている不思議に感じた。勝手に使って汚す人がいるのだろうか。

そうこうしているうちに人が集まってきた。来たのは男の人ばかりだ。簡単な挨拶をしてから各家に分かれていった。田村さんと私は、元来た道を下りステイ先の家に行った。この家でお昼を食べて夜は1人が別の家へ、もう1人がこの家にホームステイするとのことだった。とりあえずお昼の間だけでも2人で心強かった。家の庭の入り口には野菜が植えられていて、道との境に木が垣根のように植えられ、手入れが行き届いた庭だった。私たちはOpenCafeのような屋外に作られた屋根付の建物に通された。奥さんが昼食の準備をし、少し離れたところにおばあちゃんが8ヶ月の赤ちゃんをあやし

ていた。そのそばに小さな女の子が座っていた。お父さんは英語ができるようだった。以前に英語スクールに通っていたようだ。それでもお互いの会話が続かなかった。今日のお昼は、ダルだった。ご飯がどんぶり2杯分のような量がでてきて1/4に減らしてもらった。味づけは大変おいしかった。また日本人のために沸騰した水を冷やしてくれていてそのお水もとてもおいしかった。食べ終わると時間をもてあました。指差し会話でも限界があるのでその家のお手伝いをさせてもらった。とうもろこしに実をとったりしたがそれもちょっとしかなく、次の仕事って言ったら裏の畑の草むしりだった。もうちょっとお父さんが普段行っているだろうと思われる畑に連れてってくれたりして日常をみたかった。

この家のお姉ちゃんと仲良くなりたくて折り紙を一緒にしようとしたが人見知りをして泣き出してしまった。

そんなことをしているうちに学校に行く時間になり学校に向かったが、まだ全員がそろっていなかった。その間、教室を覗いたりした。先生はいなくただ机に座っているだけだったので本を読んでもらったりした。そのうちに下校時刻になったが、子どもたちは遠くから私たちを観察しているだけで寄って来たりはしない。私は一番近くにいた女の子に傍に座るようにとジェスチャーしたが一向に座る気配がなかった。そこで持ってきた折り紙を見せると遠くから見ている子も折り紙に群がった。一斉に教えようとしたが難しかった。一人ひとり折ってあげたりしたが数が数だけでとても折るのが大変だった。そうこうしているうちに全員がそろい、時間がなくなり心残りだったが切り上げて、学校の裏にある植林のような苗床に移動した。苗は、がけ崩れ防止用、果実がとれるもの、蒔き用などが様々あり、植える場所により植える種類をわけているようだった。苗木を2本もって、裏山に行った。裏山である植林は草むらで道がなく適当な場所を自分で登って見つけなくてはならない。学生たちが先に行っていたので簡単にいける位置にはすでに植えてあった上、80cmくらいに成長していた木も既に植林されていた。日本で山に入ると植林をしているか自然林かすぐわかるくらい植林地は整然と植林されている。しかしここは決められた間隔に植えてもいなかったし、植えるエリアも計画性がないように感じた。植える場所がみつからず彷徨っていたら、住民がこちらに来るように手招きをしている。促されるまま草むらを掻き分けやっと植林する場所がみつかった。山から下りると迷路のような路地をとおり到着したときの広場まで来た。学生たちは流れ解散だったのか私たちと村の大人だけがいた。そのうちにネパールの話を聞いたり、逆に日本の話をした。その中でとても印象的だったことがネパールは何年くらい日本が遅れているか？という質問だった。

時間もかなりたったためホームステイ先に戻ることにになった。みんなのホームステイ先を見ながら帰ることになった。1件目藤井さんのホームステイ先は住宅密集地にあった。ネパールの伝統的な作りの家らしかった。2件目の佐久間さんの家は平屋で横に長く大きな家だった。この家は子どもが居なく旦那さんが出稼ぎに行っているらしい。3件目は私たちがお昼をごちそうになった家だった。どちらかがこの家から離れ別の家に行かなくてはならない。私たちでどちらかが出て行くか決めていかなくてはならない。コインで決め、私が出て行くことになった。庭の物干しから自分の洗濯物を素早く取り込んだ。この家の奥さんはとても料理上手だったし、今も出してくれているミルクティーにも一工夫がされていてジンジャーが入っていておいしい。何より居心地が良いので離れるのが残念だった。とりあえず全員で私がお世話になる家に行った。そこは商店らしく、家にはガスコンロがありかなり近代的の家らしかった。家の前には子供たちがいっぱいいてどの子がこの家の子かわからなかった。出来ればこのままここにみんなと一緒にいて欲しかったが各ホームステイ先に帰っていった。取り残

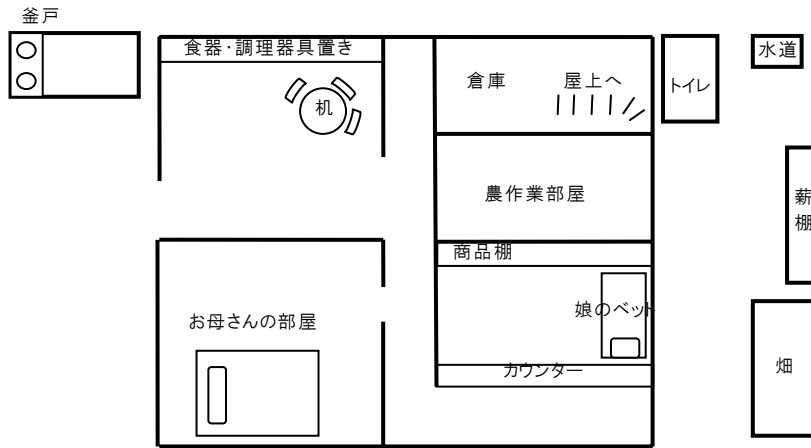
されてかなりどうしてよいか困った。何かお手伝いさせて欲しいと言ったが、ここのお母さんは家で店番をしているらしかったので何もしようがなかったし、だいたいどの子が家の子がわからなかった。行ったりきたり居場所を確保しようと思ったがなかなか居場所が見つからない。全員が私の行動を観察していたし、だからといってネパール語がわからないので指差し会話帳を使って会話しようとしたが会話になるはずもなくわからないとおばさんたちが私のことについてこっちを見ながら会話していた。とても落ち着ける感じがしない。思いついたのがお土産で持ってきたうどんを作らせてもらうことになった。うどんを作ったところでここ娘であるRISAが味見をしたがおいしくないらしい。小さな子にも食べさせていたがどうやらかなりまずらしい。めんつゆの味が口に合わないようだった。うどんで失敗して彼女らの心をつかみそこなった。ここにいっても邪魔になるので近くに子どもたちと遊ぶことにした。鬼ごっこをすることにした。まずは鬼に私になったが体力の差はあきらかでなかなかつかまらない。かなりばて気味になってきたので男の子に変わってもらった。逃げ回って限界に近づいたときお母さんの妹の娘が向かえに来た。たぶん夕飯だと思った。それで戻ったが夕飯がすぐにでてこない。家の外に小さな小屋があり土間で藁を燃やして作る釜戸が2つある。まだ何か調理している感じだった。子どもたちはまだ遊びたかったようだがみんなに家に帰るように促した。そんなことをしているとさっき私を作ったうどんに味付けを変えて違う料理として作り直してくれた。味は香辛料がきつなく、うどんの味がわかる薄味だがうどんだけで食べられるように味付けをしてくれておいしかった。ご飯は食卓を囲むではなく土間で作ったそばから食べていた。椅子が置いてあり私もその土間に入って食べた。この家のお母さんとその妹がうどんを食べていた。RISAは釜に向かってなにかを作りながら食べていた。うどんはめんつゆが口に合わないようだった。うどんの麺はSweetと言っていた。何もともあれうどんは全部食べきったので一安心した。妹一家は村の上に家があるらしく家へ帰っていった。明日また来るらしい。妹の一家が帰ると私が来た時の喧騒さはなくなって静けさが漂ってきた。残ったのはお母さんとその娘であるRISAとRISAとはだいぶ離れた小さな女の子が2人になった。この女の子2人は自分の子ではなく預かっているらしかった。夜に親が迎えにくるかと思っていたが迎えにこなかった。近所までミルクを取りにいくとのことだったので着いていった。あまり歓迎されている感じではなかったので奥までは行けなかったが入り口からは2部屋が見え手前側は家畜小屋で奥が家族の住むところらしかった。とりあえずミルクはもらえた。ミルクは紅茶として出てくると思ったが、ご飯に温めたミルクをかけたものが出てきた。うどんみたいなSweetなものを食べている日本人はミルクご飯みたいなものを好むのだろうと思って出してくれたのだろう。リビングに御座を敷いた上にお母さんと私が座っていたがやたらといろいろな食べ物を進めてくれた。今夜は予定外にうどんが出てきてしまったので今晚のご飯も残っていたこともあるだろう。お母さんも片言の英語をしゃべるが、発音がネパール語に似た発音で英語をしゃべっているのかネパール語をしゃべっているのか区別がつかないので意思の疎通が困難だった。私は水をすすめてくれたと思ったので飲むと答えたが、出てきたのは焼酎でびっくりした。RISAは宿題をはじめた。宿題中はラジオをつけていたが、お母さんに消して宿題をするように怒られていたが消すことはなかった。ラジオはお気に入りとのことだ。彼女のカバンの中をみせてもらった。教科書はなく、ノートを5-6冊程度がかばんに入っていた。数学は文系の私は習っていないようなかなり難しい数式が並んでいた。お母さんは私の指差し英会話帳をつかって女の子と私に読ませていた。21時をまわると女の子とお母さんはかなり眠くなってきたので寝ることになった。私の寝床は娘のRISAのベットだった。今まで気がつかなかったが、RISAの部屋は商店のカウンターの中の片隅にあった。お店のカウンターの中にベットが置い

てあってびっくりした。女の子らしくアクセサリや化粧品がおいてある。RISAはお母さんのところで寝ることになったらしい。お母さんはすでに寝始めたが私たちはまだ寝ないで写真をみせてもらったりおしゃべりをした。いつも10時30分に寝て、朝は4時に起きるらしい。

緊張していたのか私は4時には起きたが、まだ家の人起きる気配はしない。

しかし、昨夜からトイレに行っていなくてトイレに行きたくなった。トイレは建物の外にある。最初は家の人起きるのを待っていた。1度、出口まで懐中電灯を頼りに行ったが、鍵がかかっている開けると音がしそうなので戻ってきた。4時30分になっても物音がしない。4時にいつも起きると言っていたのでそろそろ良いかと思いドアを開けた。トイレから戻ってくるとお母さんが起きだしていた。きっと私が起きないように起きる時間をいつもより遅らせていたのである。お母さんは農作業をするための小さな作業部屋にいた。作業部屋の中にはとうもろこしが山のように置いてあり、とうもろこしの皮であふれていて。そこでとうもろこしの皮をむいていた。お手伝いをすることにした。とうもろこしの身がきれいについている大きな物は1~2皮を枚残し、それを何個にも束にして干す。実のつきが悪かったり、小さいものは籠に入れる。小さい女の子も起きてきて遊びながら普通にお手伝いはじめた。その作業部屋を出るとRISAはさっき私が籠にいれた不揃いなトウモロコシから実を採っていた。私もその作業をすることにした。実を採る時、最初の一行がとれば後は簡単に取れるがそこまでがコツがあるらしいがなかなか採れない。最初はがんばっていたがだんだん手が痛くなってきた。お茶とビスケットを食べながら1籠ようやく終えた。そう思ったらまた1籠お母さんがもってやってきた。この家は畑から村の中心部に向かっていく境にあるせいか農作業を行う人々が家の前をとおり、必ず覗いてく。私も入り口にいたのでかなり挨拶した。中にはあがりこんでお母さんと長話をしていく人もいる。朝食は8時すぎからたべはじめた。学校は10時から始まるがこの村に高学年のクラスはナルチャン村にはないのでRISAはタトパニまで行かなくてはならない。小さな女の子の髪を結ってあげたりしながら学校へ行く準備をしていた。9時10分頃友達と学校に出かけて行った。お母さんは畑に行っていたし、子どもたちは学校に行ってしまった。店が開けっ放しだったので店の前にいた。しばらくしてからお母さんは畑から戻ってきた。それから暇だった。私は子どものようにお母さんの後ろをついてまわった。作業部屋の横に屋上に上られる階段がある。コンクリートの屋上をきれいに掃き、朝、実を採ったとうもろこしを天日干した。ここの屋上から景色を眺めるといろんな家がみえる。どこの家にも外にとうもろこしが干してあった。眺めが良い場所でしばらくいたがコンクリートが熱を吸収して暑いので長くはいらなかった。お母さんは作業部屋にあったとうもろこしの皮を全部むき終わり、皮を作業部屋の小さな窓から外に出していた。乾かして薪に火をつける際に使うのだそうだ。お母さんが私についてこられても困る顔をするので居場所に困った。そこで村を散策することにした。生まれて数週間の子山羊をみたり、草むしりをしている女性に挨拶しながら散策した。集合時間30分前に昨日お昼をごちそうになった家に行き、田村さんと学校へ荷物を置いてから集合場所の広場に行くことになっていた。そのため昨日泊まった場所のお店のカウンターの中をお掃除し、お母さんに挨拶して出発することにした。お母さんは集合時間より早いよ？といった顔をしたが訳を話をして出発した。昨日お昼をたべた家に行った。人見知りしていた女の子はご機嫌で田村さんになついていた。荷物を学校に置いて来た道は戻ろうとすると近道を生徒が案内してくれた。私がホームステイ先でお世話になったお母さんが広場に来てくれていた。診療所およびインターネットの設置場所を見学し、学校に戻り学校の見学に向かった。学校のとりにある民家がお茶に誘ってくれた。お茶に蒸したジャガイモやゆで卵を出してくれて、それを食べながら学校の先生に現状の学

校の状況について情報交換した。それから学校は低学年から教室を覗いた。自己紹介したり、“大きな栗の木下で”を歌ったりした。1年生のクラスではネパール語の発音を披露してくれた。現在建設中の校舎の状況視察後、ナルチャン村を離れることになった。滞在がわずか1泊2日だった。ここまで来る道のりの苦勞を忘れるくらい来てよかった。帰るのが残念だったが、帰りは下りであれば苦勞して来た道も下りで楽だった。



ホームステイ先の家

ナルチャン村滞在記

M. T.

ナルチャン村までの道程

- ・カトマンドゥからナルチャン村までは、片道3日間を要する非常に遠い道程でした。
- ・途中の宿泊やレクチャー等の時間を排除して、純粋に、カトマンドゥからナルチャン村までの移動時間に要した時間を計算すると20時間となります。

カトマンドゥ

↓ ツアーバス (7時間30分)

ポカラ <7:30 出発>

↓ タクシー+マイクロバス+ジープ (7時間30分)、歩き (4時間) 計 11時間30分

タトパニ <19:00 到着>

↓ 歩き (1時間)

ナルチャン村

ナルチャン村

(1) 景色、気候など

- ・辺りは緑色であり、大きな滝もあり、眺めは、非常に良いです。
- ・気候は、日本の7月上旬ぐらいでした。
- ・水が豊富ですので、湿度もそれなりにあります。

(2) 施設など

①ヘルスホスト

- ・政府の施設であり、村民の健康維持・管理のために作られた施設です。
- ・保健士(?) 1名は、政府から派遣された方であり、村の方ではないです。
- ・診察は無料だが、薬は有料だそうです。

②パソコン室

- ・マグサイサイ賞を受賞したマハビール・ブンさんが進めている「ワイヤレス通信で村々をつなぐ」事業の一環で、パソコン(1995年頃の機種)が1台設置されていました。
- ・学校の英語の先生が、学校の授業開始前(～10:00)と終了後(16:00～)に、兼務で担当しているそうです。

③学校

- ・1年生～8年生までが、村の学校にはありました。
- ・9年生～10年生は、タトパニの町まで、片道1時間掛けて、通っています。
- ・それ以上になるとさらに遠くの町に行くそうです。
- ・大学は、ポカラ等の都市にしかないそうです。

④集会所になっている場所

- ・人の家の中庭みたいな場所ですが、そこで、私達は自己紹介したり、ナルチャン

村や日本についての情報交換を行いました。

⑤売店

- ・3箇所ぐらい見掛けました。
- ・そのうち、1箇所は、④の場所であり、そこでは、コカ・コーラを買うことができます。
- ・残り2箇所は、学校の側にあり、生徒がおやつ(?)などを買っていました。

(3) 雰囲気

- ・近所の方々が、気軽に、各家庭を訪れ、お茶と世間話をして帰ると言う場面がありました。
- ・まだ、日本人が日本人らしかった頃の雰囲気を持っています。

(例)

- ・気軽に隣近所の人と話しする。良く挨拶し合う。
- ・物を大切にする。無駄な物は出さないようにする。
- ・自分で食べる物は、なるべく自分で作る。
- ・時間に追われて過ごしていない。
- ・電子機器を使っているのか使われていないのかわからない状態となっていない。(電子機器は、ラジオぐらい。)

ホームステイ

(1) ホストファミリーの家族構成

祖母 信心深い心優しいお婆ちゃんです。食事や仕事を一緒にしている時に、私に気を使ってくれていました。別れる時には、花輪とバッグをくれました。いずれも手作りであり、バッグについては、作るのに長い時間が掛かったと思われます。

父 ベニ (Beni) で、3ヶ月間、英語を学んだそうです。3ヶ月間ですが、10年以上も学んでいる私より上手なくらいでした。お父さんが、英語ができたので、村のこと、家族のこと、IHCの活動のことなどを聞くことができました。

仕事は、村人が持って来るとうもろこしや米などの穀物類を機械で粉にするというサービス業です。手数料として、300mlの空き缶1~3杯分を持参された穀物から抜き取っていました。

母 明るく気立ての良いお母さんです。料理がとても上手で、とても美味しく食事をすることができました。

姉 4歳くらいのとても可愛い女の子です。最初のうちは、人見知りをして、私に近付こうとしませんでした。折り紙を折ってあげたのが、きっかけで、かなり仲良くなりました。紙風船では、2時間ぐらい一緒に遊びました。別れ際に、目に涙を浮かべていたことが、忘れられません。

弟 7ヶ月の男の子です。とてもわんぱくで、色々なものを壊していました。しかし、家族の誰からも可愛がられており、特に、お婆ちゃんは、目に入れても痛くないと言わんばかりでした。

ネコと一緒に食事をするなど家族の一員でした。

(2)衣類

- ・数日間は、同じものを着ているようでした。そのため、多少の汚れはありますが、大きくやぶれている等はなく、とてもおしゃれな感じがしました。

(3)食事

- ・毎回、十分な量の食事が出ました。美味しかったのですが、最初に出される量がとても多く、いつも、1/3に減らしてもらっていました。

8/6(月)

昼食 ダルバート家庭版：タルカリは、アル（じゃがいも）と自家製パルンゴ（ほうれん草）

夕食 ダルバート家庭版：タルカリは、アルと自家製ラヨ（からし菜）

8/7(火)

朝食 チア（紅茶）

サトゥー：ガフン（小麦）、マカイ（とうもろこし）の粉などを混ぜたもの。味は、きな粉に似ています。

昼食 デイド：マカイの粉を中心に、炊き上げられたもの。形状は、ケニアのウガリに似ています。色は、黄色と黄土色の中間ぐらいです。

鶏肉：カレー味の鶏肉です。お肉を出してくれる程の歓迎に、とてもうれしくなりました。

(4)住居

- ・3LDK：お婆ちゃんの部屋、お父さん・お母さん・子供たちの部屋、私が寝泊りした部屋（約8畳の広さ）
- ・建材は、木材よりもセメント等の方が多かったです。
- ・庭（どこまでが庭か不明）には、ほうれん草、からし菜、とうがらし、とうもろこし、うり等を育てていました。
- ・近所の人が訪問しても、座れるように、予備の椅子が10脚ぐらいありました。

(5)生活リズム

- ・夜は、20:30から21:00の間には寝てしまい、朝は、5:00から5:30には、起きると言う生活です。（「日が昇ると起き、日が沈むと寝る。」に限りなく近い生活です。）

(6)お手伝いした仕事

①畑仕事

- ・畑の草取りです。

②とうもろこしはがし

- ・とうもろこしのふさから、実をはがす作業。10本ぐらい作業しただけで、手の平や指が、赤くなってひりひりし始めました。

③機械粉挽き

- ・お父さんの仕事である機械粉挽きで、出来上がった粉を元の袋に入れる作業を手伝いました。
- ・待っている時間の方が、長かったです。（時間がとてもゆっくり流れているのを

感じました。)

(7) やって見た現地の遊び

名前不明 (下記ルールもあまり当てになりません。)

- ・コの字型に石の囲いを作って、その囲いの中に、ゴルフボールぐらいの穴を掘る。最初の人、2メートルぐらい離れた場所から、オカール (くるみ) を4個投げ入れ、2番目の人が、最初に投げ入れた人の指定したオカールに当てることができれば、2番目の人の勝ち、当てることができなければ、1番目の人の勝ち。これを相互に交代しながら、何回か実施し、勝ち数を競い合う。

(8) 日本から持参したお土産

① いもけんぴ

- ・とても美味しかったようです。口に入れた瞬間の表情や言動が、それを感じさせました。

② 砂糖菓子

- ・まあまあのようなものでした。翌日、お姉ちゃんが近所の男の子と遊びに行く時に、うれしそうに持って出て行きました。

③ 折り紙と折り紙の折り方の本

- ・きれいな色の付いた紙が、様々な形のものに変わっていくのか興味深かったようです。飛び跳ねる蛙は、お姉ちゃんがとてもよろこんでいました。
- ・持って行った広告紙で、紙鉄砲を作りましたが、これは、お母さんが、とてもよろこんで、パンパン鳴らしていました。

④ 紙風船などの伝統的な玩具

- ・紙風船は、お姉ちゃんが、とても気に入って、2時間ぐらい一緒に遊ぶことになりました。私は、汗でびしょりになりました。
- ・吹くと丸まっていた先が伸びる笛も、お姉ちゃん、近所の男の子も取り合いしながら、遊んでいました。

IHCの活動の体験、見学

(1) 生活林づくり

① 苗作りする樹種選定の考え方

- (a) 薪として利用できる木であること
- (b) 家畜の飼料になる木であること
- (c) 果樹

※生活林 (=人間中心) の樹種選定のため、生態系の保全の観点からは、入っていません。

[生態系保全のためにはネパール・ハンノキ、ネパール・マツなどの在来種を選定し植樹しています。今回訪問した下ナルチャン村集落周辺では「生活林」をつくっていますが、上ナルチャン村から上部地域には広大な「自然林」(生態林) 保全地区があり、ここでは生態系の全面的な保全にとりくんでいます。今回のツアーでは、下ナルチャン村のごくせまい範囲しか見ていません。]

「生活林」と「自然林」とは明確に区分され、集落周辺部に「生活林」をつくって、住民はそれのみを利用するようにし、上部に現存する「自然林」を住民によって破壊・後退されないようにし、生態系を保全しています。（田野倉記）

②育てている苗木の樹種

①の考え方から、育てている苗木は、下記となっている。

- (a) ハンノキ
- (b) スギ：木材用
- (c) マツ：木材用
- (d) ミカン：果樹
- (e) シソ：木材用
- (f) ツァンプ：木材用
- (g) カニアン
- (h) ?：家畜の飼料用

③今回の植樹参加者

現地：約 50 名

日本、IHC 関係者約 10 名：合計 約 60 名

④植樹本数

- (a) 私個人：2 本
- (b) 全体：2 本×約 60 名＝120 本

⑤今回の植樹場所、過去の植樹したものの状況

- ・村の裏山(?)。数年前から植えている場所。
- ・苗木の育成場所から植樹場所まで遠く、また、植樹場所は、とても急斜面でした。
- ・6 年前に植えたシソが、順調に育っていることを確認できました。
- ・ここ数年間に植えた苗も着生しているのが、確認できました。（着生率は、不明）
〔活着率は約 75 パーセントです（田野倉記）〕

⑥改善点

- ・ポット苗のポットが、植樹場所に捨てられたままとなっています。ポットは、土に戻らないので、不要となったポットは、必ず持ち帰るように指導した方が良いと思います。

⑦感想

薪が重要な燃料となっており、そのため、山の木々が切られ、草だけの状態となっています。カトマンドゥから片道 3 日間も掛かる村で、土砂崩れが少しでも起こりにくくすること、薪を近くの山で調達できるようにすること、果実などの食料を近くの山でとれるようにすることを目的とした植林活動は、本当に、有意義なことだと考えます。

欲を言えば、人間中心の樹種選定ではなく、そこに豊かな生態系が戻ることも観点に入れた樹種選定がされるとより良いのではないかと思います。

〔先にも触れましたように、ヒマラヤ保全協会保全協会は、「生活林づくり」とともに、ヒマラヤ本来の生態系保全にも取り組んでいます。その領域は、生活林エリアの100倍以上のエリアにおよんでいます。

そもそも、ヒマラヤの森林破壊は、住民による「自然林」の伐採により次々に進行してきました。

そこで、これ以上の「自然林」の破壊・後退をふせぐために、集落の周辺領域（集落の近隣エリア）に、住民の生活に役立つ高生産の「生活林」をつくり、植林をつづけながらそれを計画的に利用・管理・維持していく、つまり「生活林」の経営をすることにより、集落からある程度はなれた所にのこる「自然林」の木々を利用しなくてすむ（これ以上、自然木を伐採しなくてすむ）ようにする、というのが基本的なコンセプトです。

このような仕組みにより、「生活林」をつくり経営することは、ヒマラヤ本来の「自然林」や生態系をまもることになるのです。私たちヒマラヤ保全協会は、「自然林」エリアにおいては外来種を植えず、外来種を駆除し、ヒマラヤ本来の生態系・自然を徹底的に保全するようにしています。（田野倉記）

ナルチャン村滞在記

Y. H.

はじめに、ナルチャン村までの道のりは本当にキツイものでした。タクシー、ジープ、徒歩6時間と一泊をかけて今までにかいたことのない汗の量をかきながら辿り着きました。だからこそこまで頑張っていくのだから村で過ごす時間は大切にしようと思えました。

8月6日

村に入って一番初めに気付いたことは石の段差が多くて、平野ではなく高低の差が大きかったこと。毎日、村人の方はこの道を歩いているのかと思うと相当な体力がある民族なのだろうと感じ取れました。村長さんの家にある広場に到着し、イスを出していただいて簡単な歓迎会が行われました。その時に村人の方も10名前後、集まって下さりました。事前にモンゴロイドの民族と聞いていましたが日本人や中国人とは違い、濃い顔のモンゴロイドだったので驚きました。

自己紹介をしてそれぞれホームステイ先に行くことになりました。私は内心ドキドキすぎてホームステイ先に行きたいような行きたくないような不思議な気持ちになりました。ホームステイ初挑戦ということもあったし、言葉が分からないということは本当に不安でした。家に着いてまず、お話ししたのはお母さんのリラさん。若くて素敵な笑顔が印象的でした。娘の4歳になるレジナちゃんともお話を一緒にリラさんが作ってくれたお昼のダルバートを食べました。私は出してもらったスプーンで食べましたがレジナちゃんは小さい手を使って頑張って食べていました。まだ子どもなのでポロポロ落としながらでしたがやはり片手で食べるということは難しいことなのだと思います。

その後、お母さんとレジナちゃんと3人で私の旅の指差し会話帳を使って色々なお話をしました。その時にレジナちゃんは次女で長女はソアナちゃんという子がいて今は学校に行っているということが分かりました。お母さんはなかなか言葉が通じない私に切磋琢磨しながら色々と本を使いながらお話を続けてくれました。しばらくして私は『ジャパニーズ コセリ』と言って持ってきたお土産を渡しました。私が持って行ったのは生タイプの味噌汁、おせんべい、タマゴボーロ、折り紙、ノート、シャーペン、ボールペン、消しゴム、家族の写真、ネパールへ発つ前に行った神社のパンフレットです。最初は食品のお土産と写真を渡しました。タマゴボーロはレジナちゃんが気に入ってくれたようでした。家族の写真を見せた時に私は本を見ながら「父・母・妹」とネパール語で説明しました。するとお母さんが自身の写真アルバムを持ってきて説明をしてくれました。たくさんの写真を見せてくれたので私も成人式で着物を着た写真など、もっとたくさんの写真を持って行けばよかったと後悔しました。やはり、自分が自分の国でどのような行事や観光でどのような人たちと一緒にいたのかという写真を見れば初対面でも大体その人の感じが分かると思いますし、ホームステイのような寝食を共にする場合にはそのような心遣いが必要だと思いました。

午後からナルチャン村の小学校へ行き、植林を行いました。まず小学校の職員室で自己紹介をして苗木を作っている庭へ向かい、苗木の説明を受けました。予想以上の種類の苗木があったので驚きました。苗木を持って高学年の小学生達と植林を行っている場所へ向かいました。やはりかなり高い所まで上っていったのですが、子ども達はスイスイ上へ進んでいってしまうので体力の差を見せ付けられましたし、小さいうちからこのような道を毎日、歩いているから足腰が鍛えられるのだと思いました。

植林を行う箇所は本当に急斜面で何かに捕まらないと登っては行けないし、滑り落ちてしまいそうでした。村の方が穴を掘ってくださって苗木を埋めました。大変な道のりを越えて植えただけあって愛着が沸いて記念の写真を撮りました。立派な木に成長するまでは何十年もかかりますが日本に住む私の代わりにナルチャン村を見守って欲しいです。

植林が終わると村長さんの家の広場へ行ってお茶やとうもろこしを炒った、つまみをいただきながら村の方とお話をしました。村のお医者さんもいらっしゃったので村での主な病気やお医者さんの一日の仕事内容などをお聞きしました。驚いたのは地震や広島・長崎の原爆を村の方が知られていたことです。地震に関しては日本は地震が頻繁に起こるから軽い家を建てているという間違っただけの情報が出ていたことに驚きました。防災と地域関係を研究テーマとしている私としては直後に『違います！その逆です！』と言っていました。偶然にもデジカメ内に新潟県中越沖地震の被災地である柏崎市内の様子を写した写真があったのでお見せして被害の状況を説明しました。ネパールでも今後、大きな地震が起こる可能性があるとのことなのでぜひ対策を練っていただきたいです。ですが、中越沖地震でも全壊・半壊してしまった建物はほとんど築30年以上の古い建物でしたのでナルチャン村の家屋もほとんどが全壊してしまうのではないかと心配です。山の標高の高い所ですし、急斜面なのでどのような被害になるかは分かりませんが村を見て対策は確実に必要だと感じました。

他に印象に残ったお話は村人の方から『ネパールは日本と比べてどのくらい遅れていますか』という質問です。その時に遅れているといえばそうかもしれないけど、それがネパールの良い所なんだけどなあ・・・と内心思っていました。それを言うのは失礼なのかなあと思い留まってしまいました。お話である日本人の方がネパールの道路など手作業での工事を見て『日本も100年前はこうしていた』と言ったそうです。それを聞いて私はその発言も心無いなあと思ってしまうましたが現実ではあるし変な気遣いをする方が失礼なのかもしれないと考えてしまいました。

次に田村さんが最後に仰っていた『日本は物が大変豊かではあるが自殺者が3万人を超えている。豊かな生活よりもナルチャン村のような自分で食べ物を作ったりする自営の心が必要なんじゃないか』という言葉が印象的でした。私も日本の生活に疑問を感じてこのスタディツアーに参加したこともあり、その言葉がじっくり感じることができました。

お話が終わった後は各自のホームステイ先を回りました。その時感じたのは私以外の皆さんのホームステイ先はかなり近代的だったことです。自分のホームステイ先が嫌だという訳では全くないのですが違いに驚いてしまいました。佐久間さんから『土壁で古い家の方が歴史を感じることができるから当たりだと思うよ』と言われて嬉しさが増しました。全員のホームステイ先を回った帰りに大平さんと私は小学校の先生に家までお誘いいただいたのですが、途中で急に知らない民家へ入ることになって私達は訳の分からぬまま家の中へお邪魔させていただきました。すると夕暮れ時で薄暗い家の中にガタイの良い男性がびっちり座りこんでいて最初は本当に怖かったです。何をするのかビクビクで座っていたところ、ロキシーというネパールのお酒と、とうもろこしのつまみを出して下さって座談会が始まりました。英語で会話していたのですがきっと英語が聞き取れない私を見て家の方が『日本はアメリカに原爆を落とされたから英語がしゃべれないのか』という質問を受けてしまいました。ここでも原爆の話が出たので本当に有名なんだと思いました。その後、ニュースで日本の原爆投下日のことが流れていたようでその為、原爆の話題が頻繁にでていたということを知りました。

私はお酒が苦手なのですがロキシーのアルコール度は低いと言われたのでせっかく出していただいたので頑張って飲んでみました。すると口に入れた瞬間ノドが熱くなってビックリしました。さっぱ

りした味ではありましたが、とても私には飲める代物ではありませんでした。

会話が終わってホームステイ先に帰ると家には、おばあちゃんとお母さんの妹さんも来ていました。長女のソアナちゃんも学校から帰ってきていたので自己紹介をしました。夕飯まで皆さんとお話をしていると家に日本人が来ていると噂が広まったのか子ども達が次々と遊びに来て、私の家族の写真や指差し会話帳を物珍しそうに見ていました。お母さんがみんなに『ジャパニーズコセリ』といってタマゴボーロをあげていて優しいなあと思い、私も見習わなくてはいけないと思いました。色んな人が来てくれたので何度も自分の自己紹介とお母さんからもらったネパリネームの紹介もしました。ちなみに私がいただいたネパリネームは「レーザー」です。

後から思えばお母さんが故意に色々な人をよんで村の人に外国人と触れ合ってもらったり私にも村の色々な人と交流させようとしてくれたんだと思います。本当に有難いことです。途中からあまりにネパール語が通じない私にお母さんが若干、怒っていた部分もありましたがそれもコミュニケーションの大事な部分だと思うので感じ取れてよかったです。

夕飯のダルバート食べてレジナちゃん、ソアナちゃんと折り紙をしました。色々簡単な物を作りましたがツルが人気で作り方を覚えようと2人は必死に頑張っていました。ソアナちゃんは自分で作ったツルや私が作ったツルを大事そうに食器棚の上に並べくれました。その姿を見て本当に嬉しくなりました。今の日本でツルなどの折り紙を作ってそこまで大事にしてくれる子供はまずいないだろうと思います。今の日本とは真逆で子どもらしい子どもが本当に可愛く見えました。

その後、テレビでネパールのドラマを観て寝ました。お母さんは私に家の中で良いふとんと掛け布団を用意して下さり、虫除けの網までかけてくれました。申し訳ない気持ちと本当に親切にしてくれた嬉しさが混ざっていました。

8月7日

朝、起きてからも家にお母さんの友達などお客さんが来てくれたのでお話しをしました。日本の文化をちょっとでも分かってもらえるように片言の英語と指差し帳で悪戦苦闘しながらお話しを続ける努力をしました。一段落したらお母さんがジャガイモを蒸かしたものを出してくれました。ネパールに来てからジャガイモは頻りに食べたのですが、本当にどこのジャガイモも身が締まってホクホクして美味しいので感激しました。特にお母さんが出してくれたものは出来たてということもあって美味しさのあまり、何個も食べてしまいました。

集合の時間になったので身支度をして挨拶をしようとした時にお母さんとレジナちゃんがお花のレイをかけてくれて額に赤の印も付けてくれて『また来てね』と言ってくれました。お土産まで下さって本当に優しい家族の下でホームステイができて良かったです。心のこもったおもてなしに感動しました。

家族と別れを告げて集合場所から診療所へ向かいました。中を見させていただき、2階にはパソコンもあり小学校の情報の先生から村でのパソコンの使用法などを聞きました。意外なことに世界中の色々なサイトを閲覧しているとのことでした。

その後、小学校へ行き田野倉さんと佐久間さんが小学校のデータを校長先生から聞いている間に残りのメンバーで一クラスずつ回ってネパール語や英語での挨拶や唄を歌ったりしました。まさか自分がこの歳になってみんなの前で「大きな栗の木下で」を大声で歌うことになるとは思いませんでした。子ども達と交流ができて本当に良かったです。気になったのは1年生のクラスの子達は元気が良すぎ

とても大きな声で黒板を読んでいるのでその声はかなり響くので他の学年の子が授業に集中できないのではないかと感じてしまいました。

最後に職員室でお話をしてお花のレイをいただいた後に職員の方達と記念撮影をしました。その頃には子ども達も校庭へ出てきていてレイに付ける葉を1人ずつ渡してくれました。ホームステイ先のソアナちゃんも恥ずかしそうに葉を私に渡してくれて嬉しかったです。みなさんに手を振って村をあとにしました。この村での思い出は決して忘れることのできない、私の短い人生ですが一番、濃い旅の思い出となりました。色々と不便ではあるかもしれないけれどナルチャン村をみんなで発展させていって欲しいと強く願います。

ナルチャン村で聞いたこと

M. S.

■8月6日 ナルチャン村広場に椅子を出して村の人々と歓談

- パウダル村の小学校にはコンピュータが沢山ある。タトパニにはない。
- 74年前、40年前に大地震があった。
- 「ポカラヤカトマンドゥにいくことはあるか？」

ヘルスポスト職員：ある。一週間～一月ステイすることも。タライ出身で村人の健康改善のためナルチャンに派遣された公務員なので、都市での仕事もある。

- 日本人→住民「地すべりは近年ふえたのか？」

住民：増えている。昔からあったが、雨の多い年に特に多い。

日本人→住民「近年雨は多いのか？」

住民：そうでもない。むしろカリガンダキ河岸の道路建設のせいで起きている。今年は例年より雨が多く、最近一週間ほど雨が降り続いた。また、普段ナルチャンでは雪は降らないが、今年の2月に雪が降った。ベニでも60年ぶりに降った。カトマンドゥでも降った。

- 住民→日本人「日本の田舎と比べてどのくらいここネパールは遅れているか？」

日本人：どのくらいか数字に表すとよく分からないが、日本の年配の人がネパールに来ると子供の頃の風景と似て郷愁を誘うようなので、20年くらいではないか。

住民：いや、もっと遅れているだろう。西ネパールはここよりも遅れている。

日本人：日本は物が豊かでも幸せではない。自殺者が三万人いる。

- ネパールの夏休みは？

学校の先生：45日間。授業はない。このあいだ家で農業の仕事をする。

ヘルスポスト：ダサインの13日間

ちなみにヘルスポストの勤務時間は10時～4時

10時～2時：患者の診察 2時～4時：事務

■8月7日 ヘルスポスト2階（PCのある部屋にて）

- ヘルスポストは公立である。
 - ・ 治療に多少はお金をとる。
 - ・ 診察は無料である。
 - ・ 建物は現在借家なので、新しく建てないといけないが、現在建てる土地がない。
- 2階にはパソコン通信のためのパソコンが設置してある。
 - ・ ラジオ電波を使用した無線パソコン通信（インターネット）ができるようにする計画である。
 - ・ 今までは手紙でやり取りをするしかなく、隣村との連絡も歩いていくしかなかったが、インターネットにより外国とも交信できるようになる。子供達も大人もまだコンピュータについては何も知らないので、今後ゆっくり覚えていきたい。
 - ・ 将来的にはここヘルスポストではなく、学校を拠点にしてインターネット通信をしたい。
 - ・ 上ナルチャンにはまだ通信環境はないが、これからトレッキングルート開発とあわせて設

備を整えていきたい。

- ・ マハビールさん（IHCN会長）の貢献が大きい。今の設備はマハビールさんが工面してくれたものであるが、新しくするととなると自費でまかなわなければならない。（プロバイダなどはどうしているのかという質問に対して）電話料金は払っているがネット接続料金は払っていない。マハビールさんが払っているのだろうか？
- ・ タトパニには電話はあるが、インターネットはない。
- ・ 7）（ネット以外にパソコンを使う教育はしているかという質問に対し）ワープロや表計算などのアプリケーションを使う教育は現在はやっていない。先生が仕事で使っている。
- ・ パソコンの管理は学校の英語の先生が担当している。

■8月7日 ナルチャンの学校にて

■学校について

- 9～10年生が勉強するための校舎を建設中である。
タトパニには10年生までであるが、ナルチャンは1～8年生までしかない。現在は9～10年生はパウダル村の学校に寄宿して通っている。
- 先生の給料は国から小額出るのみで、残りは村でまかなっている。学校設備は、ティハールのときに先生生徒が歌ったり踊ったりして寄付を集め、用意している。その他に外国の団体の援助もある。
- 年予算をくみ、それが足りない場合は村から捻出したり、住民から広く薄く寄付を集めたりしてまかなう。まれに2～3万ルピー程度政府から補助が出たり、外国人から寄付がくることがあるが、その他には収入はない。こういった問題はネパール国内のどこでも同じである。
- 村には10人の先生が必要だが、政府からは6人しか派遣されてこない。2人は村から金を出して雇っている。よって現状2人足りず、仕事が大変である。
- ダカル・コンファレンスという援助団体がインド周辺国で教育援助活動をしていると聞いているが、まだ来ていない。
- ネパールの識字率は50%くらい。下位カースト、女性、高地住民、60歳以上の人々の識字率が低い。
- ネパールでは大学ができたのは55年前である。他の国ではそれが200～300年前なので、ネパールはこの点でも遅れている。
- 大学進学 2人進学した。一人はポカラのコマース（商）学部に入學し卒業。
- 11～12年生には6～7人が進級した。
- S L C（School Leaving Certification）＝10年生終了の卒業試験を通ったものは今までの延べ人数で26人。今年は9人。
- 政府からは退学（ドロップアウト）する人数を減らせと通達がきているが、なかなか向上しない。
- 大学に入るには、入試を通らなければならない。（S L C（卒業試験）とは別にある。）大学は有料であり、国立は安く、私立は高い。

国立：入学料 1500ルピー 授業料月額 200ルピー

私立：入学料 5000 ルピー 授業料月額 1000 ルピー

※参考 公務員給料月額 5000 ルピー程度

- (ネパール人から日本人に質問) 日本に自治体の運営する大学はあるか?

日本人返答：ある。国立・県立・市立など。

ネパール人：ネパールには、そういう構想はあるが、まだない。放送大学も作れたらいい。

- 生徒数について

今年度の生徒数

学年	生徒数	備考
1年生	28	
2年生	26	21+5 (他の学校から)
3年生	15	
4年生	20	
5年生	19	
6年生	28	
7年生	30	
8年生	27	
計	193	男子 91 女子 102

昨年の進級実績

学年	元の生徒数	進級者数	備考
1年生	45	21	低学年の進級が難しい
2年生	19	12	
3年生	19	15	
4年生	22	18	21+1 (他の学校から編入)
5年生	15	12	14+1 (他の学校から編入)
6年生	35	29	進級試験を受験したのは33人
7年生	33	27	進級試験を受験したのは27人
8年生	31	27	進級試験を受験したのは27人

試験に受からない人が多い。貧しくて来られない人、都市部にいってしまう人、学校の設備が悪いため来なくなる人もいる。

- マオイスト内戦のため、村から都市部へ移動して生徒数が減った。現在マオイスト問題が解決して情勢もよくなっているが、村に帰ってもしかたがないので帰りがらない人がほとんどである。
- ネパール政府の(教育に対する)政策が流動的で見通しが利かず良くない。
前の政府の政策では9~10年生を創設するはずだったが、昨年夏に11~12年生まで作りなさいとの通達があった。だが、予算は9~10年生の分しかない。これに対する政府の援助は全くない。

同様なことがパウダルでもあり、9~10年生を創設したのに、政府からそのための資金が届

かない。これからもこのようなことがあるのではないかと疑っている。これはネパール全体での問題である。

- IHCの支援で机・椅子などの学校設備を作っている。使用している材木はツァンプ。

■村について

- 人口 約 1800 人 （通称下ナルチャンのワードには 800 人）

- 民族

マガール人がほとんど。その他カミ、ダマイなどの下位カースト、チェットリ、ネワール人、標高の高めの場所にタカリー人。

- 100 人ほどの男性が外国へ出稼ぎに行っている。主に湾岸諸国。
- ほとんどが農家。作物は、じゃがいも、小麦、トウモロコシ、ヒエ、米、豆（大豆）、菜の花。
- 上ナルチャンと下ナルチャンがあり、200 人の人が季節によって移動して生活をしている。移動する理由は、気温など住みやすさのためもあるが、農地を上にも下にも持っている人がいるため。米は下でしかとれない。

10 年ほど前まではほとんどが上に住んでいたが、最近は多くが下に移り住んでいる。下のほうが街に近く、ヘルスポスト、郵便局、デイケアセンターもあるので便利。上にも電気は通っており、5 年生までの学校もある。

- アンナプルナ山域のコプラを通るトレッキングルートを開発中である。（IHCも支援。）現在コプラにロッジを建設中。眺望もよい。コプラからナルチャンに降りるトレッキングルートを作り、ナルチャンが潤うとよい。

T.T.：環境を守りながら旅を楽しむエコツーリズムを目指す。

M.H.：鳥や花の名を教えてくれるガイドが置くと良い。

校長：ガイドは養成していきたい。

- 周辺の標高の高い地域には伝統的な蜂蜜狩りをする人たちがいて、これも名物の一つになるだろう。去年もネパールのテレビ局が蜂蜜狩りを撮影に来たが、天候が悪くあまりよく撮れなかった。
- 標高の高いところの森林には豹がいる。人間には害はない……？
- ナルチャン村は水が豊富なので水力発電をはじめの調査が民間会社で始まっている。
- 水や森林などの資源はあるが、現在有効に使われていない。今後はこの活用法を考えていく。

貧しいということが、どういうことなのか分からない

M. S.

私にはこれで三度目のスタディツアー、夏にIHCの森林保全事業地にいけるということで、首都カトマンドゥしか訪れたことがなかった私は非常に楽しみにしていました。

ポカラから山村に行く途中、谷川カリガンダキに沿う砂利道をタクシーで進めるところまで進んでいくと、土砂崩れの土砂にタイヤをとられて立ち往生したトラックに行く手を阻まれました。おかげで先へ進むことができません。

私達はタクシーから出て土砂崩れの様子を眺めました。高い崖に囲まれたカリガンダキの泡立つ流れはセメントに似た灰茶色で、岸には質素な家が並んでいます。みれば日本人仲間が、同じように足止めされたジープのネパール人の男の子達と戯れていました。

男の子達は四人。最も幼い子が最も社交的で、年を聞くと十歳らしく、彼はバク転をするからそれを写真に撮れと言います。そして見事にくるりと回って着地。驚くべき運動神経。私達はやんやと彼のアクロバットを褒めました。他の子供達もバク転なり前転なりを見事に披露しました。彼らはデジカメの画面に映る自分の姿を喜んで覗き込みます。

彼らの鞆の柄を褒めたり、T シャツに描かれたアメリカのプロレスラーのことを話題にしました。やがてジープから大人が彼らに向かって何か叫ぶと、彼らはあつという間に駆けて戻って行きました。遊びの時間は終わりのようです。

様子を見ていると、あの十歳の少年はジープの天井の積荷を降ろし、それを背負って歩き出しました。それで私達はまた驚きました。彼の体の倍はあるような、旅行者三人分ほどの荷物なのです。彼らとその大人たちは運搬業かポーターなのでしょう。こんなに小さい子供があんな重い荷物を運ぶ仕事をしているなんて、なるほどネパール人は肉體能力が優れているわけです……。

私達はタクシーを捨て、マイクロバスで先へ進むこととなりました。タクシーのトランクから自分のザックを取り出すと、あの少年が戻ってきて私の鞆を持とうとし、「ルピー？」と言いました。(ルピーはネパールの通貨単位。)
「ノー、ノー」と私は彼を振り払うように荷を自分の肩に負いました。彼が荷運びの仕事がしたいようでも私はそれを無視しました。少年は「ベニに行く？ 手伝いはいない？」と訴えかけてきますが、私は「ノー」と断って、その後は何度尋ねられても返事をしませんでした。

妙技を見せてくれた時、私達は友達で、私は彼らの力を褒め称えました。でも、突然私は彼の友達ではなくなりました。彼はバスの窓の私の顔をしばらく見つめ、そのあと無言で去って行きました。荷運びの少年は労働の対価として金をもらおうとしたにすぎません。幼い頃から働く彼を私は彼を惨めとは思いません。その逞しさを尊敬さえします。ただ、私が示した豹変ぶりに彼が傷つくことを恐れます。労働それ自体を可哀想だとは思いませんが、毎日の労働によって彼が学習の機会を失うのなら可哀想かもしれませぬ。つまるところ、私には貧しいということが、どういうことなのか分からないのだなと感じたのでした。

ネパールは日本に比べてどのくらい遅れているか？

M. H.

私がこの旅で一番印象に残っている言葉の一つであり、答えが出ずに今も時々考えている言葉がある。ナルチャン村の人と意見交換していた時、私たちに「ネパールは日本に比べてどのくらい遅れているか？」という質問であった。また、ホームステイ先の娘からも別の言い方で私に聞いてきた。

日本という国の歴史を振り返ると明治維新後、西欧化が一気に進み経済発展している上、第二次世界大戦後の焼け野原の状態から数十年で経済大国になった。発展途上国は、この一面だけを見ると自分達も出きるはずと思える成功例の一つであり、敬意を表してくれている言葉の表れだと思う。しかし民族構成、国の形状、政治状況、現在の経済状況、世界が急速に技術革新へと進んでいる中、まったく同じ状態でネパールを含む発展途上国が日本のような経済発展するとは考え難い。

第二次世界大戦後はアメリカが主導する資本主義が主流となってきたと思う。しかし、本当に経済的に豊かになれば人間は幸せになるのだろうか？

日本も確かに経済大国になったが、自給率が低いこと、少子化問題、ストレスの慢性化など様々な弊害がある。世界的にも数々の環境問題が取り上げられている。

西欧の一部は資本主義が産んだ弊害から脱却するため、色々な方向性を模索している事例を聞く。例えばオランダは労働力のフルタイムからワークシェアリングを導入したことや、北欧は高い福利厚生を導入させ社会主義と資本主義を半々に取り入れている。ネパールの近隣にあるブータンは経済的豊かさより心の豊かさを求める政策を打ち出している。

発展途上国は先進国と同じように物の豊かさを求めた後、心の豊かさを追う必要があるのだろうか？ネパールはネパールの政策について強いメッセージを出す時期だと思う。なぜならネパールの隣接国のインドや中国は物の豊かさを求めているため、その両国の間に挟まれたネパールはその国々に翻弄されてしまう危惧がある。既に二カ国による経済発展の波に翻弄され始めてきている。

私はネパール人が自分達は貧しいという一面性だけを見ている状態から多角的に物事を見ることが出来る状態へと意識改革が必要だと思う。少なくとも外国人からみるネパールにはネパールの良さがある。ネパール人と外国人でこの議題で討論することにより、ネパールや先進国の現状について良さも悪さも見て欲しい。日本についても経済発展の良い面だけではないということに気がつくはずである。また、ネパールのよさも客観的に見つけることができるかもしれない。

ネパールの方向性について、一つの答えを見つけ出すことは難しいことであり、多数の選択肢があることと思うが、私はネパールのご事はネパール人自身が決めることが重用だと考えている。ただ、彼らが答えを見つけるまでは経済的支援も技術提供も必要なことであり、同じアジア人として協力をお互いする必要があると考えている。特に経済発展する中で生まれるだろう環境的、文化的破壊を最小限に抑える技術については先進国が積極的に援助すべきことである。

多くの選択肢の中からネパール国民が自分たちの判断の元、豊かになる方法を導き出し誇れる国づくりを目指して欲しいと強く願って止まない。

最後に、ネパールの現状について考える機会を作っていただいたヒマラヤ保全協会の皆様に感謝申し上げます。また、旅行中に様々な解説をしていただき、ネパールの現状について説明していただいたT.T.様には深く感謝申し上げます。

スタディツアーに参加して
衣食住には困っていない

M. T.

ナルチャン村に特化せずに、一般的に感じたことを列挙します。

(1) 山の上の方まで、木がある場所が少ない。

- ・移動時に通ったルート一般的に、山に木があまり生えていませんでした。恐らく、地域住民が、薪の確保のために、皆伐したものと推測します。
- ・土砂崩れが起こる可能性がある場所は、至る所がありました。

(2) 土砂崩れが沢山起きている。

- ・上記(1)の他に、中国政府による道路建設が原因で、沢山の土砂崩れが起きています。
- ・道路工事後に、法面保護をしないと、土砂崩れは、こちらからも起き続けるでしょう。

(3) ゴミ処理が不十分

- ・カトマンドゥで、特に、目立ったのが、ゴミの山です。歴史的建造物の横でも、ゴミの山があり、悪臭を漂わせています。ゴミ回収車の回収頻度が、少な過ぎます。ゴミ回収車が来ても、全てのゴミを回収できずに、一部を残したまま、帰っていく様子を目の前で見ました。
- ・土に埋めても地球に返らない廃棄物が、川べりに大量に捨てられているのを見て、とてもショックでした。
- ・ほんのわずかな貢献ですが、私は、土に埋めても地球に戻らないものは、日本に持ち帰って来ました。(10ペットボトル8本、缶2本、ポリ袋2個 =ナルチャン村からの帰路で出たものは、全て日本に持ち帰って来ました。)

(4) 衣食住には困っていない

- ・アフリカの砂漠化などとは、縁のない、恵まれた気候のため、食料や水に困ることがなく、餓死する心配がない場所です。
- ・ナルチャン村に限らず、他の地域にも、送電線があり、電気も供給されていると推測されます。
- ・しかし、ネパールの人たちは、「自分達は、非常に貧乏である」と言う先入観が、はびこっており、自分たちの生活を幸せに感じられなくなっているようです。
- ・コンクリートジャングルの中で、不要な物で溢れ、1日中、広告と言う「買え買え」情報にさらされ、年間3万人の自殺者が出るどこかの国と比較すると違う意味で、ネパールの方が豊かだと思えます。

スタディツアーに参加して

ネパールで学んだこと

Y. H.

まずはじめに、今回ツアーに参加したきっかけは正直な所、ツアーの内容にとっても興味があったということでネパールという国に対しての知識はほとんどありませんでした。出国前にできるだけ勉強はしましたが実際にネパールに到着してから沢山の発見がありました。ネパールで学んだ事は大きく分けて4つあります。

1つ目は公害問題です。急激に車やバイク、家電などの機器が入ってきたことで街にはバスや自動車の排気ガスが充満していました。あそこまで空気が悪いとは思っていなかったのが本当に驚きました。公害などからくる病気が充満しないか心配です。ですが、日本も車が出始めた頃は同じような排気ガスを振りまっていたのかと思うと恐ろしくなりました。新しい文化が入るとまた変化があるかもしれないませんが、身体のためにもネパールに早く廃棄ガスを規制した車が入ってきてくれないかと願うばかりです。

2つ目は文化の大切さです。以前から私は日本の文化の衰退を残念に思っていましたし中途半端な欧米化になっていく日本への問題意識がありました。ネパールも歴史的なレンガ造りの家や石畳を壊してしまってコンクリートの建物や道路にし始めているということを知り、日本と全く同じ道りを歩いていってしまうのではないかと悲しくなり、危機感を感じました。やはり一度、築いた文化をまた再生させることは不可能に近いですし、近代的な暮らしよりも歴史ある文化と共に生活する事の方が何倍も意味があって民族として世代を共通するものなのだと思います。ネパールには日本が犯してしまった過ちを繰り返さずに自分達の文化の素晴らしさなどに気付き、保護を行って欲しいと思います。

3つ目は心の優しさです。特筆すべきはホームステイ先のナルチャン村でお世話になった方々のことです。笑顔で出迎えてくれてネパール語もほとんど話せない私に一生懸命、指差し帳を使って意思疎通を行おうとして下さいました。村と私の両者にプラスになるように色々な人との交流の場も作っていただき異文化交流の楽しさを実感しました。村の方も色々な家の方が私達が近くを通るとお茶やつまみを出してくださり、IHCのプロジェクトが村の方にも理解され、プラスになっていることが感じ取れました。心のこもったもてなしを受けることができ本当に嬉しかったです。

4つ目は弱者への対応です。これは状況を学んだということですが、街で物売りをしている少年や観光バスの入り口で寂しそうに話かけてくる子ども、道で片手が無い方、車椅子に乗っている方に恵んでくれてと言わんばかりに手を出されることが心に残りました。

物売りの場合は、ネパール人同士で売買ができなければそもそも良くないと思いますし、子どもの今後の事も考えて買わないようにしていました。ですが、車イスに乗っていたり身体の不自由な方の場合は本当に生きていくのに大変なのだと思いますし、車イスは簡易的なものでしたので心配になってしまいました。ですがその方の事を知っているわけではありませし、寄付はしませんでした。心情としてはキツイ部分もありましたが自分で体験をして考えることができ良かったと思います。

以上のことをスタディツアーで学ぶ事ができました。本当に沢山のことを学ばせてくれたネパールにとっても感謝しています。これからもネパールがより良い国を目指す為に IHC の活動を応援させていただくと共に、微力ながら自分のできることは引き続き行っていきたいと思います。今回のツアーでお世話になりました皆さま、色々ご指導いただき、本当にありがとうございました。

提言

ネパールのために日本の教訓をいかせ！

2007年8月9日、ナルチャン村からボカラにもどり、参加者全員でスタディツアーのまとめのミーティングをおこなった。議論をしながら各自が意見を「KJラベル」に書きだし、それらを図解化、重要度にしたがってランキングし、最後に、もっとも重要なポイントを抽出した。以下は、それらを文章化したものである。

ネパール人は、「ネパールはまずしいです。日本にくらべて何十年もおくれています」と言っていたが、このようなことを聞くのは残念であり、こうした意識は変えた方がよい。文明化がおくれているとしても、それは決して悪いことではないし、ネパールのオリジナリティをいかしていくことが大切である。そのことをわかってもらいたい。ネパール人の中には、本当はまずしくないのに、まずしいという“思い込み”があるのではないだろうか。そもそも、ゆたかさ・まずしさということは一本の物差しではかかれるものではなく、その基準をつくってしまうのがよくない。

日本は、経済的な発展を優先しすぎたために、古き良きものをこわしてしまった。以前、保存されている日本家屋の中をみたときに、「これは何につかうんだろう？」などと海外の文化をみているような気持ちになってしまったことがあり、すごく残念な気持ちになった。ネパールの人々にはそんな気持ちになってほしくない。ネパールでは、経済的発展を最優先することにより、日本のようにふるいものをこわしていくようなことはさけてほしい。伝統文化の保存はむずかしいかもしれないが、それをおこなわないとすべてが均一化し特色がなくなってしまう。

今こそ、私たち日本人は、日本の伝統文化を破壊したことを“過ちと”してみとめ、その教訓をネパールのためにいかしていくべきである。現在の日本は、各所で文化的破壊がいちじるしく、それは日本人の精神文化をも破壊してしまい、心をやむ日本人を多数うみだしてしまった。

それでは、どのようにして伝統文化を保全したらよいのだろうか。その参考例は日本にもある。たとえば、日本の川越“小江戸”のようなやり方は大いに参考になる。一定の区域をさだめてその中では、町並みや景観もふくめてすべてを保全する。そして、そこは単なる保全地区ではなく観光地としても発展させる。実際、小江戸には、全国から多くの観光客がおとずれているのである。

ネパールは基本的には観光立国である。ただ単に、近代化をすすめるのではなく、観光立国を政策として明確にうちだし、観光産業の発展につくすべきである。日本の小江戸のようなやり方は大いに参考になるはずである。

そのとき、私たち日本人は、みずからの伝統文化を破壊してしまった教訓と、小江戸のような文化保全地区のやり方という二つの側面から、ネパールの発展のために協力できるはずである。

写真



ヒマラヤ保全協会ネパール事務所にて



ナルチャン村に到着



村人とともに植樹



生徒たちと交流



わかれの挨拶



まとめのミーティング

今回のスタディツアーの参加費、ならびにご納入いただきましたヒマラヤ保全協会・会員年会費は、ナルチャン村の森林保全のための支援金としてつかわせていただきました。ここに明記して、ふかくお礼を申し上げます。

ヒマラヤ保全協会・夏のスタディツアー2007 報告書

編集・発行 特定非営利活動法人 ヒマラヤ保全協会

〒151-0053 東京都渋谷区代々木 3-5-7 シグマロイヤルハイツ 403

TEL/FAX:03-5350-8458 E-mail: ihcjpn@ybb.ne.jp <http://www.ihc-japan.org/>

(非売品・禁無断転載)